

業平朝臣歌物語

露といたて

文藝春秋



露とこたへて

業平朝臣歌物語

一九七六年四月二十五日 第一刷

著者 塚本邦雄

發行者 檜原雅春

發行所 株式會社 文藝春秋

郵便番號一〇二 東京都千代田區紀尾井町三番地

電話 東京(〇三)二六五局一二一一番

印刷—精興社 製本製函—大口製本

萬一落丁亂丁の場合はお取替へいたします

© Kunio Tsukanoto, 1976. Printed in JAPAN

露とこたへて

目次

一の巻

しのぶの亂れ

早春加冠

9

蔭よ蔭よ

22

簾靡きて

29

中有の螢

36

二の巻

春やむかしの

蔭の宿を

45

われから

53

梅が香に

65

芥川味爽

70

三の巻

夢にもひとに

夢は八橋

85

浅からぬ

97

富士の煙

107

いざ都鳥

115

四の巻

渡れど濡れぬ

鈴鹿黄葉

129

見ぬ夢は

137

初しぐれ

145

棹さして

155

五の巻

夜半にや君が

秋ぞ斑鳩

167

眞弓機弓

175

橘あはれ

180

いのち紅

194

六の巻

これをや戀と

和泉なる

205

瀧は布引

216

世は秋の

226

戀はいさ

234

七の巻

雪踏みわけて

春宵織女

247

心や浅き

258

深雪の底

268

昨日今日

276

跋

285

裝幀

政田岑生

露とこたへて

業平朝臣歌物語

名にしおはばいざこととはむ都鳥
わがおもふひとはありやなしやと

一の巻

しのぶの亂れ

早春加冠

ことさらに強く締めた髻の根が痛い。初元結、男に成つた験の爽やかな疼きである。顚顚から舐にかけて龍腦でも塗つたやうにひりひりする。これも青春の香とひびき、心躍りのせるだらう。

正月十三日、加冠の儀式は午前に終つた。あたりが急に色めきたつ。十五歳にもなつてからの元服、それも世が世なら王子と呼ばれる身の業平にはやや遅過ぎた憾みもある。童形に匿され抑へられてゐた美貌が、角髪を削ぎ髻を立てた途端、突如迸り出た感じで、冠を正して立つた時は居竝ぶうからやから、思はず息を呑んだ。母の伊登内親王に生寫しの眉目は殊に互え互えと澄み、妻戸の彼方から覗いてゐた青女房や女童、さては父の隨身らまで眩しげに目を逸らした。

彼は讚美と憐憫相半する周囲の目を意識してその場に立ちつくしてゐた。采女が沿坏を下げるに來る。暗い水面に父の横顔がちらりと映つて消えた。五十まぢかい佻しい顔であつた。その父平城上皇の謀叛の日から既に三十年、嵯峨帝在世の續くかぎりは二度とふたたび浮び上れぬと諦めた鈍い目差を、業平はむしろ憎んでゐた。前栽の瘦せた紅梅の根方に一掬ひの斑雪が残り、どこからか紛れこんだ瑠璃鸚鵡が餌を漁る。出廂の向うから催馬樂の調べが洩れて來る。明日の踏歌に備へて隨身の誰かがさらへてゐるのだらう。ささやかな祝宴の準備が始まる。高坏や臺盤の運びこまれるのを横目に、業平は簀子敷を渡つて母屋の北に出た。

東屋の眞屋のあまりのその雨そそぎわれ立ち濡れぬ殿戸開かせ

障子の影で拍子を取つてゐるのは若い隨身の雄嶺であらう。そこへ聞き覺えのある女の聲が絡み對句を歌ふ。

鋤も鋤もあらばこそその殿戸われ鎖さめ押し開いて來ませやわれも人妻

歌は律の「東屋」、興を唆られて障子を開けようとした時、女は歌ひ終つた

聲をひそめ、男に寄添ふ氣配がする。催馬樂にことよせて雄嶺が誘つたのか、あるひはその逆か、元服の晴儀に表の賑ふ一時、巧に、眞晝間の逢ひを楽しむ二人を、彼は嘉したい氣持だつた。それが風流、雅といふものだらう。

簀子の上にこぼれた米を拾はうと鵜が庭から飛上る。婆娑と羽搏くその音に障子が開き、桂の袖が見えた。業平が一步あゆみ寄るのと、女が外へ躍り出るのが同時、彼女は業平を振仰いで聲を上げた。十年前まで在原家に仕へてゐた乳母の茅である。春日のはづれ、帯解の在に歸つて佛師の妻となり、間もなく死別したと聞いてゐた。色白の肥り肉は年を隠すのか、とても四十過には見えず、花菱紋の桂の棠棣色もよく映る。さういへば雄嶺とはその頃から淺からぬ間であつたのかも知れない。業平の母にも愛され、曲りなりにも眞字の百餘りは書けるやうになり、和歌も詠みならふといふ才はじけた質、彼も殊のほかなつてゐた。お懷しやと轉び出て袖をとらへ、一別以來の種種を涙まじりに語らうとするところへ、業平、吾子はいづれと呼ばはる聲がする。形ばかりの宴が始まるのだ。品數は多くはないが乾鮑、雉子の足、海松、甘柿、鯉、梨と山海の幸を選び、特に若菜は芹に苣、薊、水甘草などを羹にして、業平の好みを知つたゆかしい料理であつた。末座にはやがて茅も連なり、他にも日頃は見かけぬゆかりの人の顔が混る。父に差されるままに盃を重ね、業平は早うつらうつらと行平の朗詠する得意の「胡笳歌」を聴いてゐた。「君聞かずや胡笳の聲

最も悲しきを。紫髯^{しぜん}緑眼^{りよくがん}の胡人^{こじん}吹く。之を吹くこと一曲猶未だ了らざるに、愁^{しう}殺^{さつ}す樓蘭^{ろうらん}征戍^{せいじゆ}の兒^じ」詠^{うた}ひながら獨高^{ひとりかう}ぶつて涙ぐむ。業平は賦詩^{ふし}作文^{さくもん}を習ひながら、心はいつの間にか和歌に向く資質であつた。兄の感動を見てうなづきつつも、彼は萬葉の家持の歌に引かれてゐた。父が次に「經國集」の小野岑^{きののみねもり}守の「江樓春望^{かうろうのしゆんぼう}」を、祝儀の意をも籠めて誦^ずし終る頃は、座もざわざわと亂れ始めてゐた。人はどうして「文華秀麗集」や「凌雲集」などと、嵯峨帝の手前味噌めいた詞華をもてはやすのだらう。いかに巧緻を極めたところで、所詮は唐の秀才の物真似に過ぎまい。父さへもややもすれば漢才を尊^{たふと}び、歌會を催すことの絶えてないのは訝しいことの一つである。今日もわざとのやうに十年前世に現れた詞華集の詩を歌ふのは、嵯峨帝への無意識の阿^あ夷^ゆではあるまいか。「滔滔たる流水何の似たる所ぞ、四海朝宗して聖王に歸す」とはそらぞらしい。虚しさは承知の上で、無視されても貶められても血に繋る帝や院に忠誠を盡さうといふのだらうか。父はさうであつても、在原の姓を、烙印として受取つた兄弟はそれに従ふ氣持はない。

業平は熱^{あつ}る頬を冷まさうと庭に降り立つた。斑雪はすっかり消えてゐた。紅梅が暗い火の粉を散らす。形ばかりの乏しい遣水^{やりみづ}の底には去年の紅葉が沈み、これも半^{なか}ば腐つてゐる。ものごろろついてこの方、邸は内も外も、次第次第に荒れる一方であつた。落ちぶれながらも宮中へ上れば一應は舊帝の親王とその

眷族、體面は保たねばならず、保つに足るほどの祿を賜るわけではない。體の
良い飼ひ殺しの生殺しなまころ、見てゐるといらいらする。業平は耐へられなかつた。
灰色の青春など願ひ下げ、何か眼の昏むやうな華やかな日があるはずだ。

「今年の花はなにとぞ春日の里で。鷹も連れてお伴いたしませう。茅のゆかり
の者たちも待ち上げてをります。もともとあのあたりは御領地、狩はともかく
一度御檢分を仰がねば」

瀧口のあたりから雄嶺がすつと現れて早口にかう言ふ。猛猛しい顔をやや赤
らめて俯うつむくのは照れ隠しであらうか。若君をお誘ひしてほしいと、茅にさんざ
口説くどかれたに違ひない。檢分云云は、何によらず名分に拘こたへる父への配慮として
聞いておかう。雄嶺の父は鷹飼たかひであつたとか。三男の彼は職は繼がなかつたが、
隼はやぶさを手に据ゑて歩むくらゐは易易たるものだ。笛吹や勢子せこは春日にもゐるだ
らう。櫻の咲き白む交野かたのの小鷹狩を兄と共に見たのは去年、今年は桃李の紅も
混る帶解おびとけ、櫟本いちののもとのあたりで、一人鈴の音を聞かう。獲物は雉子、山鳥ばかりと
は限るまい。彼は武骨な雄嶺の勧誘にさりげない微笑を報いた。風が急に冷え
て天から風花がちらつく。宴果てて三三五五下向げかうする人らは、籬まがきの傍に立つて
會釋する貴公子の艶冶えんやな姿に改めて目を細める。後二、三年すればなまめいた
噂の飛び交ふ中でわが世の春を謳ふことにならう。たとへ沈淪の家系に人と成
つても、あの拔群の容姿と才を女は放つておくまい。

櫻狩は彌生七日に決めた。この日は上巳で兄の行平は左大臣邸の曲水宴に招かれてゐる。父は家に籠るといふが、察するところでは、太皇太后橘嘉智子の許へ緋桃の一枝に新作の詩でもつけて奉りに行くのだらう。父も兄も彼の鷹狩行に大した興味は示さなかつた。母は昔馴染の典侍に頼んで早速二藍の摺狩衣を誂へてくれた。たとへ忍びの旅でも元親王の子は親王の子、狩袴も行膝も巻纓の冠も揃へねばならぬ、それを著た業平の美しさをこころゆくばかり眺めた。その日は拂曉の出發であつた。雄嶺の他には仕丁の男童火鹿一人だけの伴、何かと危む母に彼は手を振つて別れを告げる。新月よりも匂やかな後姿に彼女は涙ぐむ。業平は蘆毛、雄嶺は童と共に鹿毛に跨り、朝靄の中に消えて行く。

伏見から宇治へ出て南は久世、彼方には井手の玉川、山吹は青い蕾を兆した頃だらう。蟹満寺、淨瑠璃寺を経て木津まで行けば春日は目と鼻の先、急ぐ旅ではなし、いづれ向うで三、四夜は泊ることにならう。酩酊の春の光を身に浴びながら、ゆるゆると馬を進めよう。平城の宮跡などへは寄るまい。血を分たれた祖父の執心の都とは知りながら、それゆゑなほ禍禍しい氣がする。隼は籠に入れて携へて來た。梅林に遅咲の八重紅梅が散り紛ひ、杏、海棠は三分咲、楓の若芽は朱に滲み、柳は緑青の絲を綴り、谿には囀る鶯、日の光はさんさんと零り、雄嶺はあからさまな戯歌を軽やかに口遊む。樹脂の香、花花の匂、薄ら汗のにはひ。菜の花畑の向うには笠を冠つた女らが屯して晝餉してゐる。男童